

星城大学「研究紀要」第 11 号 退職記念寄稿
随筆 教育について考えたこと

伊藤征一

I. はじめに

このたび、9 年間お世話になった星城大学を退職することになった。この機会に、研究紀要に自由に書けるページをいただいたので、これまでの教育活動で考えてきたことについて記してみたい。

東京の某大学に勤務する友人との会話で、大学の授業のありかたに話題が及んだ。その大学の会議で、「これまで面白い授業を受けたことが無い」という学生が何人もいたという報告があり、「面白い授業とは何か？」というテーマで議論を行ったということである。

「面白い授業とは何か？」という問題は、私が 9 年間追い求めてきたことでもあり、本学にとっても有用な話なので、興味をもって議論の結果を聞いてみた。その結果は、残念ながら期待はずれのものではあった。

某大学での議論では、授業を面白くするために、「学生に作業をさせるような授業」、「他の学生とのコミュニケーションをとるような授業」、「基幹科目を少人数制にする」といったことが挙げられたという。要するに、授業形態に関する議論ばかりで、「面白い授業」の内容、コンテンツに関する議論が無かったということである。

私は以前から、『授業形態や教育技術をいくらいじりまわしても効果は少ない。それよりは、授業内容、コンテンツの改善の方がずっと効果が大きい』という仮説を持っていた。そこで、回帰分析を使った分析「授業に対する学生の満足度の構造」（参考文献[1]）を行って、それを実証した。この分析は、星城大学研究紀要 第 5 号に掲載し、高度ネットワーク社会研究所のサイトにも掲載してあるので、この問題に興味のある方はぜひ一読いただきたい。

この分析結果から導かれる結論として、以下のことを主張したい。

『現在の大学で行うべきことは、授業形態や教育技術の改善のためにいたずらに会議を行ったり組織をいじったりして教員の時間を奪うのではなく、教員に研究や授業準備のための時間を十分与えて、授業内容を面白くするための研究や、教員の人格識見の陶冶に努めさせることである。』

II. 良い授業とは

(1) 学生は授業に何を望んでいるか

上記の東京の某大学の話と同様に、これまで、筆者の周囲で議論されてきた「授業改善」に関する話題は、もっぱら、授業を良くするための教育技術的な事項であった。例えば、授業の教育効果を高めるために、「学生同士の討論を授業の中に取り入れる」とか、「教員と学生との対話の機会を増やす」、あるいは「座学以外の授業形態を考える」といったものが多かった。

また、現在実施されている学生の授業アンケートも、そのような観点からの質問項目が

中心となっていた。しかし、そのような教育技術の改善で学生を満足させることはできるだろうか。私はできないと思う。最も重要なのは授業の内容、コンテンツである。

私はこのことを以前勤務していた職場で強く感じたことがあった。4半世紀ほど前のことであるが、当時の勤務先で講演会を開いたことがあった。講師はNTTデータ社の某役員、聴衆は一般企業の社員である。資料はWORDで箇条書きされた紙切れ1枚で、パワーポイントを使うでもなく、眠気を催すようなぼそぼそとした話しぶりで講演が始まった。主催者側の私としては、心配になって聴衆を見ていたのだが、最初の10分間くらいは聴衆もつまらなそうに聞いていた。その後、20分、30分と経つうちに、眠気が解けて話に耳を傾けるようになってきた。さらに1時間くらい経った時には、皆、興味深げに身を乗り出すようにして聞いている。そして、講演が終わったときには、良い話を聞かせていただいたという満足感がこちらにも伝わってきた。このことからわかるのは、話の内容さえ良ければ、資料が貧弱でも、眠気を催すような話しぶりでも、聴衆は満足するものだということである。

(2) 面白い授業とは

面白い授業とはどんな授業か、ズバリ一言で定義することはできないが、とりあえず、「世の中そんな仕組みになっていたのか」というような知的好奇心を満たす授業、「そうだったのか！知らなかった」というような意外性を持った授業、とでも言うておこう。要するに、聞いていてわくわくするような、知的好奇心を満たすような授業のことである。

面白い授業は、分野に依存しない。語学やITのような一見無味乾燥に思われる分野でも、面白くすることができる。その例として、筆者が受講した予備校の英語の授業を紹介する。半世紀前の駿台予備校での話であるが、英文解釈の授業に鈴木長十という老齢の先生がおられた。先生の和訳文は、直訳文と比べるとかなり飛躍した言葉が使われているのだが、原文が言いたいことをぴたりと表しているものだった。意識といっても原文と訳文の間に飛躍があってはならない。原文の言わんとしていることを必要にして十分な日本語に訳す必要がある。鈴木先生の授業は、どうしてそのような訳文になるのかを聞いているうちに、いつのまにか言語の本質に思いをいたすようになるという、知的好奇心を満たす素晴らしい授業であった。

現在の大学の授業も、そのような知的好奇心を満たすような授業でなければならない。どんなに偏差値の低い学生でも、高校までの授業とは一味違う面白い講義が聴けるのではないかという期待を持って入学してきたはずである。そこで面白い授業に出会わなければ、「なーんだ、こんなものか」ということになって、授業に出たくなってしまう。その時、欠席は5回までしか許さないといって首に縄を付けて教室に繰りつけておくことは学生にとって拷問である。ここは、授業に出たくなるような授業をするよう、教員の側が努力すべきである。それでも欠席が多いようであれば、「欠席したくなるようなつまらない授業でごめんね」と謝らなければならない。規則で学生を縛るのではなく、出席したくなるような面白い授業を行うよう努力すべきである。

(3) 面白くないが良い授業

良い授業イコール面白い授業かということ、必ずしもそうではない。そのことを示す良い事例があるので紹介する。これも半世紀ほど前の、私が大学生の時の話である。当時、理工学部数学科に数理統計学の授業があった。

内容はというと、「数理統計学演習」という問題集の中の問題を解いてレポートを出させ、翌週に先生がその解説をするというものであった。担当の先生はかなり老齢で、黒板に計算式を展開しながら息苦しそうにぼそぼそと話をしてくれるのだが、まったく面白くない授業であった。また、問題集というのが、各章のはじめに簡単な解説があって、そのあとに問題がズラッとならんでいるだけの味もそっけもないもので、しかもその問題に略解が付いているのである。

はじめは略解をまる写しすればいいということで喜んだのだが、レポートを書こうとしても略解なので行と行の間に飛躍がある。四苦八苦してその隙間を埋めざるを得ないように仕組まれていたのである。そのような無味乾燥な教材と面白くもおかしくもない授業ではあったが、毎週行間をうずめる作業をやったおかげで、受講し終わったときには、数理統計学の力がかなりついたことを実感した。

この経験から、『面白いだけが良い授業ではない』ということを悟ることができた。この授業が成功した最大の要因は「略解」である。もし、略解のない問題集を与えられていたら、誰もレポートを出さなかったと思う。川の向こう岸まで飛べといわれても、川幅が広すぎれば飛ぶ者は誰もいない。その場合は、川の上に飛び石を置いておき、その上を跳んで行けといえよよいのである。略解がその飛び石だったわけであり、飛び石の置き方が指導者の腕の見せ所となるのである。

(4) 学生に議論させ考えさせる授業

今から10年ほど前に、ゆとり教育の一環として、「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること」を目標とした「総合的な学習」なるものが登場した。その中で、能力のない学生に対して、「自分で考えろ」とか「学生同士で議論しろ」という難題を押しつける教育が奨励されたが、これは学力の低下をもたらしたただけだった。

考えるための素材を持たない学生に考えろと言っても、何も出てこない。囲碁で、定石を知らない者が何度実戦をやっても強くならないのと同じことである。にもかかわらず、定石をおぼえることよりも実戦をやる方が面白いので、初心者は基礎を固めずに実戦をやりがる。

授業の場合も、面倒な基礎的勉強をするより、学生同士わいわい議論する方が面白いだろう。しかし、そうやって程度の低い面白さで学生を喜ばせるだけではいけない。教員がしっかりストーリーを作っておいて、ところどころに議論という飛び石を置いて学生を誘導していくことが必要である。

学生に議論をさせる授業として、マイケル・サンデル教授の「ハーバード白熱教室」というテレビ番組が話題になっているので、私もちょっとのぞいてみた。そこで感じたことは、「この授業は、教授のストーリーに沿って話を誘導していくために、ポイントごとに議論という飛び石を置いている」ということである。ここで重要なことは、「教員のストーリーが主役であり、議論はストーリーを展開していくための小道具にすぎない」ということである。議論なしで効果的にストーリー展開ができるなら、議論は必要ないのである。

(5) 座学か実学か

近年、授業を面白くするために、学生を外の見学に連れ出したり、地域との交流と称して地域企業の手伝いをさせるようなことが安直に行われるような風潮が見うけられる。し

かし、そのようなことが大学教育として適切であろうか。それを考えるために、以下に一つの事例として、日本経済新聞（平成 15 年 2 月 26 日）の記事「商店街活性化に若い力」を取り上げる。

この記事によると、中京大学が八事駅周辺の商店街と組んで、空き店舗対策に乗り出すという。インターンシップ事業の一環で、空き店舗で実際に店を運営するそうである。また、瀬戸市の瀬戸銀座通りの商店街では、名古屋学院大がカフェレストランやFM局を運営するという。このように大学祭の模擬店に毛の生えたような活動をやらされて、学生は楽しいかもしれないが、高い学費を払う親はどう思うだろうか。

私の担当する I T 経営の科目は、科目の性格上、企業見学などを取り入れる余地はあるかもしれないが、私の授業ではあくまでも座学の中で面白い授業ができないかを追求した。学生を見学に連れ出したり、学生同士議論させたりせずに、教員の話だけで面白い授業ができないか、その一点に絞って愚直に授業をやってきた。それが成功したかどうかは、学生の評価をまたなければならないが・・・。

III. 教員の授業に対する思い入れ

以上、授業内容、コンテンツの重要性について述べたが、もうひとつ、別の観点から、授業について考えてみる。そのため、以下に、高校および中学の国語教師として 5 2 年間の実践経験を持つ大村はま先生の著書[2]の一節「胸のときめかない教材では、授業をすたくありませんでした」を引用する。

———（引用開始）———

私が行っていた授業は教科書に頼らない授業、自分で資料を豊富に用意した単元授業でした。

ですからたくさんの本を買って読んで、本以外の資料も探して、準備は大変でした。でも、せっかく用意したのだからと、その教材を使って何度も授業するということが、私にはできませんでした。

二度目になると、初めて教材を見つけて用意するうれしさがわいてきません。私自身が、いそいそと教室に入れるのは、新しい物を持っていくときだけなんです。それを一度味わうと、そのときめきがないものを持って教室に行くことがいやになります。

それに、自分が前の授業でよくわかっている展開、こなしってしまった教材、それらをやるときには自分の心の中に小さな慢心が生まれます。謙虚さが減ります。そして自分だけにわかる程度かもしれませんが、一生懸命になる、その程度がちょっと違うのです。

子供は新鮮さに感動します。私自身が、新しいものへの小さな不安と期待を持ちつつ、子供に向けて、その教材を提供している、それが子供を動かすのです。

なのに、二度目だと、子供と同格に胸がときめかない。それが、私はいやだったのです。

———（引用終了）———

ここで述べられていることは、教育技術でもなく、授業内容でもない。あえて言うならば、教員の授業に対する思い入れとでもいうようなものである。教員が教材を最初に作り上げたときの「これは面白い」と感じた新鮮な気持ちが二度目になると薄まってしまい、その微妙な変化が教員の授業に対する態度を変えてしまうというのである。ここでは、教員が自分の作った教材に対して感じる「鮮度」の変化が問題にされている。

このように教員の側の心理状態が授業の結果に影響することを私も感じたことがある。途中まで快調に進んでいた授業、学生がシーンとして真面目に聞いていた授業、それが、ふと残り時間が少ないことに気づいて、時間の割り振りが気になりだしてから、シーンとして聞いていた学生がザワザワし始めたということがあった。教材に向いていた私の気持ちが、時間配分に向いたときから、教材に対して「一生懸命になる、その程度がちょっと違ってしまった」ということである。

教員がわくわくしていなければ学生をわくわくさせることはできない。「こんなに面白いことがあるんだが、この面白さをなんとしても学生と分かち合いたい」という気持ちが学生を動かすのではないか。以上のように、面白い授業を行うためには、まず、内容そのものが知的好奇心を満たすような面白いものであることが大前提であるが、もうひとつ、教員の心理状態が学生に微妙に影響するということも忘れてはならない。

IV. おわりに

以上、良い授業とはどのようなものかについて考察した。また、教員の授業に対する思い入れや心理状態が重要であることを指摘した。最後に、良い授業を行うために教員は何をすべきかを考えて、本稿を終えることにする。

上記のように、授業を面白くするために授業形態や教育技術をいくらいじりまわしても効果は少ない。それよりは、授業内容、コンテンツの改善の方がずっと効果大きい。その授業内容なるものは、各教員の専門分野における能力や人格・識見などに基づく職人芸によって生み出されるのである。

そのような認識のもとでは、FD（ファカルティ・ディベラップメント）などの会議で「教育方法」の改善を論議するよりも、個々の教員が専門分野における能力の強化や人格・識見の向上に努め、職人芸を磨くことの方が役に立つということになる。個々の教員がそのような努力を行いつつ、十分時間をかけて授業の準備を行うことが授業改善のための最善の方法である。

だが、現在の大学には、そのような古き良き時代の雰囲気はない。教員は管理体制の中に組み込まれたサラリーマンとして、会議や雑用や営業活動に追われている。その中で大学改革が検討されているが、そこでは良い授業を実現するための本質的議論よりは、授業形態や組織形態などをいじることにあけくれて、いたずらに教員の負担を増やしている。そのようなことに忙殺されることで、意義のある仕事をしているような錯覚に陥っていないければよいのだが・・・。

大学の危機が叫ばれている現在、教員に最も必要なものは、沈思黙考する時間的余裕と、組織に縛られたサラリーマン的思考を打ち破る野性的精神であると考える。

参考文献

- [1] 伊藤征一（2005）「授業に対する学生の満足度の構造」、星城大学研究紀要 第5号、
<http://www.ne.jp/asahi/itoh/seiichi/paper/kiyou2003.pdf>
- [2] 大村はま（2004）「灯し続けることば」小学館